



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大戦期エリアーデのナショナリズムと戦後の宗教現象学
Author(s)	奥山, 史亮
Citation	基督教學, 58, 30-33
Issue Date	2023-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92845
Type	journal article
File Information	02okuyama.pdf



大戦期エリアーデのナシヨナリズムと戦後の宗教現象学

奥山 史亮

一 問題の所在

本発表では、エリアーデが戦前のナシヨナリズム的な言論を、戦後の国際秩序に対応するために再構築していった過程を整理しながら、宗教現象学の形成、およびIAHR創設との関係性を検討した¹。

二 大戦期ルーマニアの国家形成とエリアーデのナシヨナリズム

周知のようにエリアーデは大戦間期ルーマニアのナシヨナリズムであった軍団運動に参与し、農村地域の正教会に民族の精神性を見出し、それを基礎としたNation

れている。

さらにイタリアのユリウス・エヴォラも軍団の思想に共感を示し、コドリヤースおよびエリアーデと交友を深めていた。コドリヤースとエヴォラは一九三八年にブカレスト市内で対談を行ったが、エリアーデもその場に同席し、Nation形成のための創造的な犠牲をめぐり意見を交わした。この対談ではエヴォラはコドリヤースの徹底した唯物論批判と反ユダヤ主義、民族精神を重視する思想のうちに「アーリア的伝統」を見出したという。さらに、スペイン内戦におけるモツァとマリンの戦死を、唯物論に対する戦いにおいて、民族精神を新たに創造するための犠牲として認識し合っていた。創造のための犠牲というテーマは、亡命後のエリアーデが「歴史の恐怖」を構想する上で基盤としたものであり、大戦間期におけるモツァとマリンの死、そしてエヴォラとコドリヤースとの対談がその構想の起点であったと考えられる。

の形成を訴えていた。この時期のエリアーデにおけるNationとは、第一次大戦後に成立した大ルーマニア、現在のモルドヴ共和国が位置するベッサラビア等を領土として統合したヴェルサイユ体制下のルーマニアである。第一次大戦の戦後処理に戦勝国としてパリ講和会議に参加し、歴史や民族構成、経済状況も多様であった諸地域を新たな領土として獲得したことにより、それらの新領土を一つの国家として統合するための文化的な基盤を形成することがエリアーデをはじめとする大戦期ルーマニアの知識人たちが取り組んだ課題であった。

軍団運動では、スペイン内戦で軍団幹部のイオン・モツァとヴァシレ・マリンが戦死したことを、民族精神の復興と軍団運動の拡充のための自己犠牲であったと賛美する思想が浸透していた。民族や国家再建のために自己を犠牲にすること、死を経ることにより精神を刷新し、新たな人間として再生すること、新たな人間を礎とした新たな国家を建設することなどが謳われており、エリアーデがこのような軍団の思想に共感していたことは近年の研究によって詳細に検討され、否定し難い事柄と考えら

三 戦後の国際秩序とナシヨナリズムの問題：IAHR創設とエラノスへの参加

ポルトガル滞在を経て、戦後、フランスへ亡命したエリアーデは、戦前のNationをめぐる言論を新たな国際秩序に沿うよう語り直すことを課題とした。その試みの痕跡はベッタツツォーニをはじめとするイタリア宗教史学、エヴォラとの関係性、IAHRの創設、エラノスへの参加をめぐる関連資料から読み取ることができる。

ベッタツツォーニとエリアーデの往復書簡において、IAHRの構想がはじめて言及されるのは一九四八年四月二一日付の書簡であり、国際東洋学会、言語学会、ビザンツ学会のパリにおける開催に言及しつつ、これらの会場で会うことができないかと訊ねながら、ユネスコからの助成を取り付けて国際宗教史学会を創設できないものかと相談を持ち掛けている。同年五月一九日付の書簡では、高等研究実習院宗教学部門で教授をつとめていたアンリ・シャルル・ピュエシユからIAHRの構想に対する賛同を得られたこと、ヴィデンングレン、レーウらに呼びかけて「発案委員会(Comité d'initiative)」を設置したい

ことなどを伝えている。同年九月九日付の書簡では、スウェーデン政府からの助成、およびユネスコからの支援を得ることにより、学会を秋には立ち上げられるというヴィデンングレンからの言葉を伝えている。さらに本書簡には学会誌に関する初めての言及があり、『国際宗教学・民族学雑誌 *Revue internationale d'histoire des religions et d'ethnographie religieuse*』というタイトルを当初エリアーデが提案し、総合的な論文の掲載に重点をおくべきだと主張していたことがわかる。これらの書簡以降においても、エリアーデは積極的にペッタッツォーニに相談を持ち掛けながら、五十年九月開催の IAHRA ムステルダム大会前後にはローマで直接対面し、学会に関する打ち合わせやシャーマニズムに関する講演を共にしていた。対照的に戦後エヴォラとの交友は希薄なものとなり、対面したいというエヴォラからの連絡にもなかなか応じようとしなかった時期が続いた。

エリアーデは五十年八月九月にエラノス会議と IAHRA ムステルダム大会に立て続けに参加し、前者では「心理学と宗教史学——中心」のシンポジウムについて、後

者では「宇宙生成神話と呪術的治療」という演題の発表をおこなっている。いずれも再生をもたらし死、創造的な犠牲をめぐる神話と儀礼を主題とするものであり、戦前のナショナリズム的なテーマを、地域時代横断的な事例を集めて、宗教現象学的に、トランス・ナショナルなモノに組み替える試みであったと考えられる。このような活動に対してエヴォラは、エリアーデが公的な学問と認められることに気を取られ、古代の知識を近代化してしまっているという批判を投げかけ、一九六三年には戦前のエリアーデとの交友を記した自叙伝を刊行し発表した。それに対しエリアーデはエヴォラとの交友を絶つに至った。

ヨアン・ベトル・クリアーヌは、エヴォラとエリアーデは伝統主義者として共通性を有するが、戦後のエリアーデはユングをはじめとするアカデミックな領域に受け入れられるための試みを為したことがエヴォラとは異なっていたと評している。ユングやエラノスをアカデミックと見做すか否かについては諸説あるが、エリアーデが戦前のナショナリズムを、戦後の国際秩序に受け入れら

れるよう語り直していった、あるいは、偽装していったことを端的にあらわした言葉と考えられる。

四 小 結

戦後の亡命者向けの言論活動において、エリアーデが反共産主義的なナショナリズムを保持していたことは周知の通りである。共産主義との闘争においてナショナリズム的言論を武器とすることを選んだエリアーデにとって、軍団運動のイデオロギーを完全に手放すことは困難であり、そのことはエヴォラとの不安定ながらも六十年代に至るまで継続した関係性にも反映されたと考えられる。軍団運動について公的には沈黙するほかないとクリアーヌに伝えていたエリアーデにとって、IAHRA ならに戦後エラノスは、エヴォラ的な言論を抑圧しながらも、Nation を超えて普遍性を志向する宗教現象学としてそれを再構成するための場所であり、宗教現象学はエヴォラ的な記憶を抑圧し、それを昇華することで生じてきたものであったと考えられる。

一方、エラノスについては、中心人物のユングをはじめ多くの論者が戦時下の活動に対する批判、戦後世界への適応という問題をエリアーデと共有しており、このような状況において、宗教現象学とエラノスが接近するようになったことの歴史状況をより詳細に検討することが今後の課題である。